



勇者は負けたら

TS
リボンバー

性転換









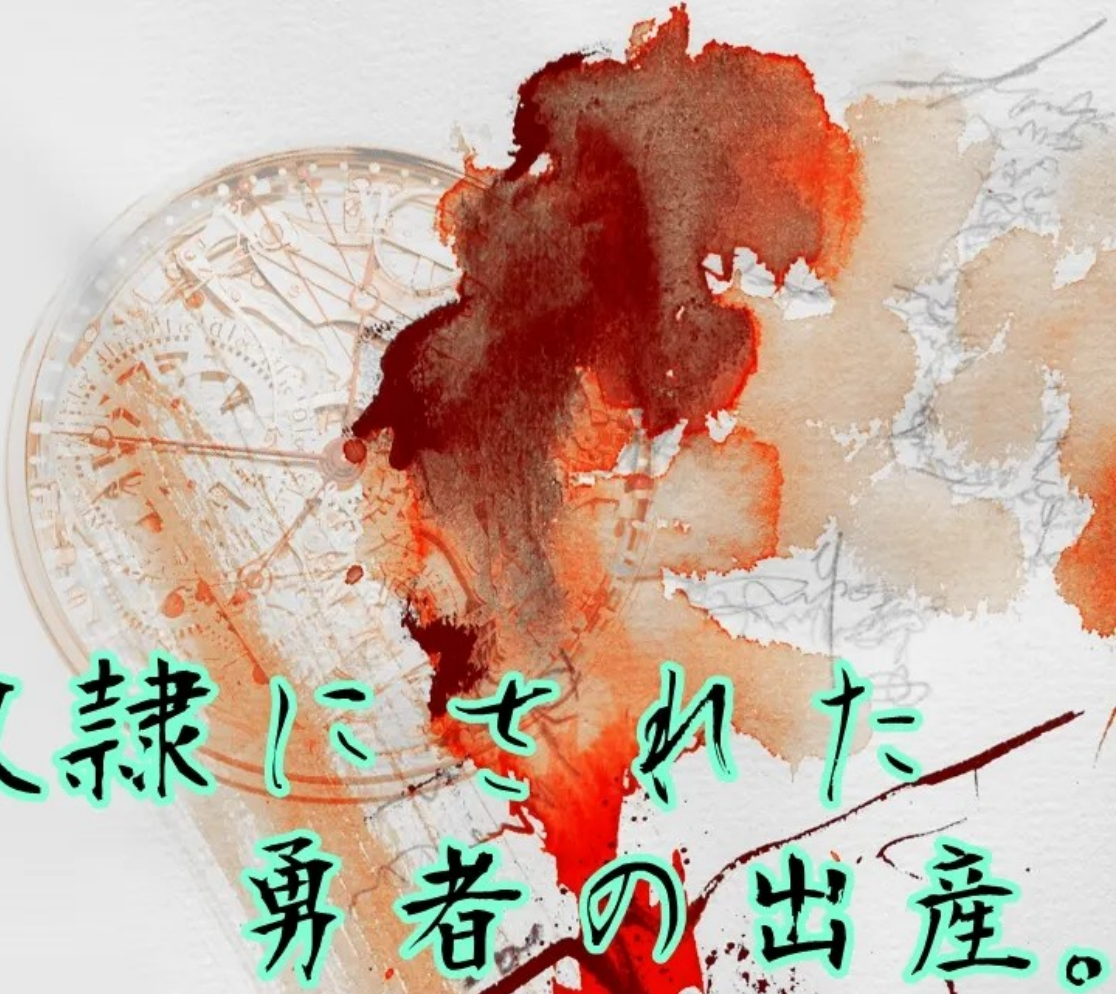
敗北と性転換

奴隸化の儀式



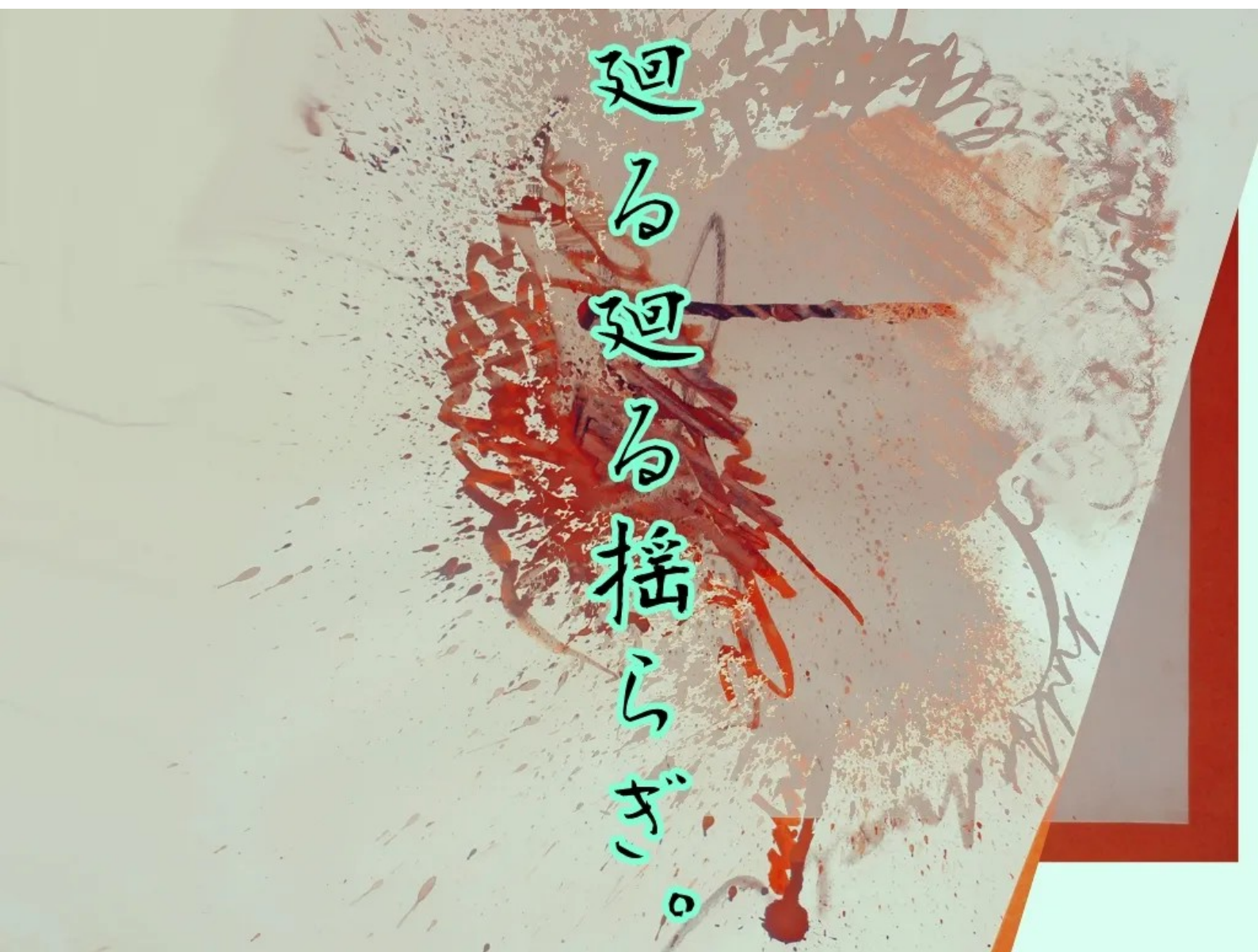


搾乳メス奴隷
にされた勇者。

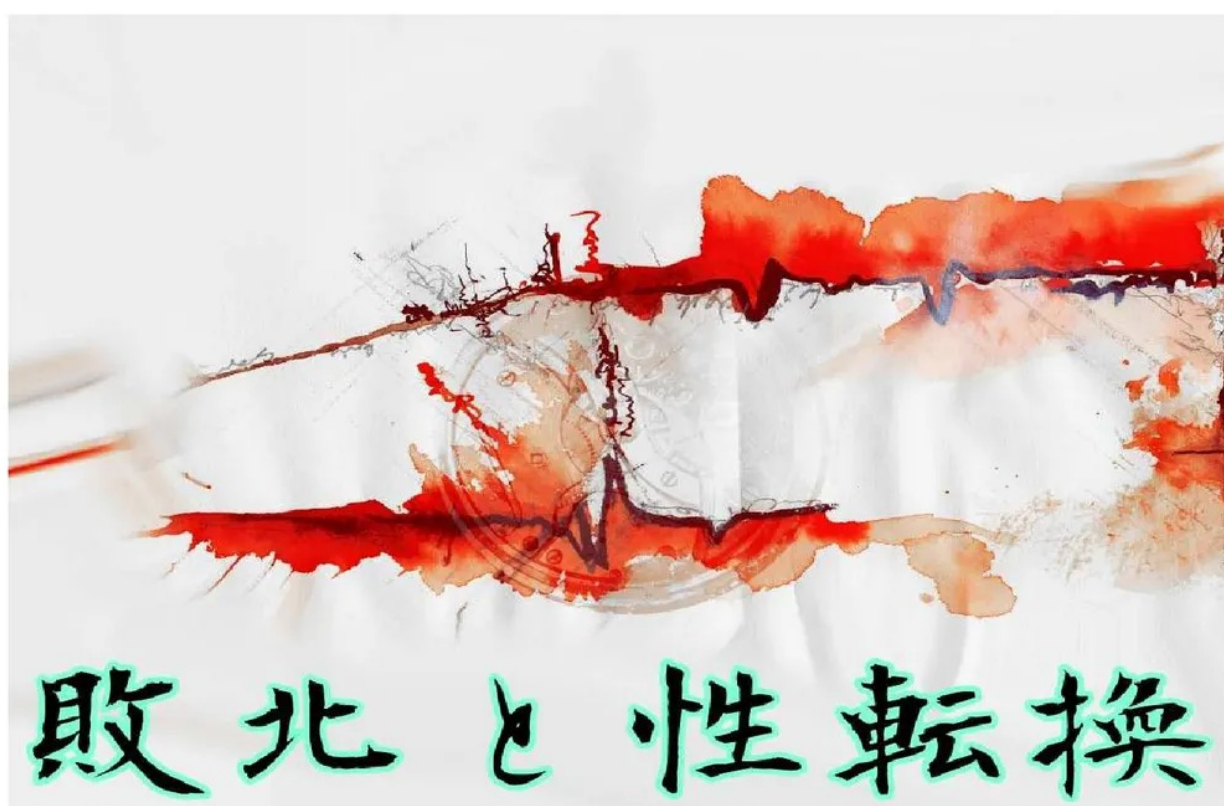


メス奴隷にされた
勇者の出産。

廻る廻る揺らぎ。







《第1章》

私は魔王フーガ様のオチ○チンを舐め上げた。
美味しくはない。

だが、光栄な気持ちで一杯だ。

おチ○ボの先から垂れる透明な液体は人間のそれよりもずっと濃くて臭い。
しかも凍るように冷たい。

私が人間だからそれを受け入れがたく、つらいものだと感じるのだ。

もしもモンスターだったらきつとこれは、至福なのだろう。

自分が恨めしく思う。

せつかくの魔王様のおチ○ボなのに。

これを楽しめたらどんなに良いか・・・。

私の話からさせて欲しい。

私はアリア。

性別は女。

魔法使いだ。

一応人間の世界では、金眼のアリアとして名前も売っていた。

自分で言うのも何だが人間としては最強の魔法使いだったと自負している。

八ツ首の龍も・・・。

九尾の狐も・・・。

十の頭を持つ魔霊も討伐した。

勇者オルクスと共に二人で、討伐したのだ。

“世界最強の二人組”

各国の王族が私達をそう呼ぶようになるまで時間は掛からなかった。

しかし魔族の王、王の中の王。

魔王フーガ様を見た時、私は勇者オルクスを置いて一人だけで魔王に挑んだ。

オルクスは強かったし、信頼を置いていたけれど、とてもではないが彼がフーガ様と戦うのは無理だと感じたからだ。

はつきり言えば、実力不足。

オルクスとて、人間としては最強の一人だろう。

私とのベアーなら尚更。

でも正直に言って、魔王フーガ様との闘いでは足手まとい。

だから置いていった。

彼が寝ている間に私は一人宿を出て、魔王に挑み、負けた。勝負は文字通り一瞬だった。

私は、自分では戦闘中に瞬きなどしてはいないと思っていた。でも実際は違ったらしい。

まぶたが降りる前フーガ様は間違いなく玉座に座っていらした。

そしてまぶたが上がったら、私は心臓をフーガ様に引きぬかれていた。

空中で吐血し、痙攣し、聖魔法を唱えるもそれらは全て場の結界によってかき消された。

結果、私の心臓はフーガ様しか知らぬどこかに封印されたらしい。

気がついた時には地下牢に放り込まれて、洗脳魔法を受けていた。

人間の世界でも、敗戦の姫君は勝利国の王族の性奴隷になるのが習わした。

どうやらその習わしをフーガ様は私で試すことにしたらしい。

普通性奴隷といえど洗脳を施し、ご主人様の所作・排泄物・精液、それら全てが快感に感じるようにしてから楽しむのが普通だが、フーガ様はそうはなさらなかった。

フーガ様にご奉仕することを快感と洗脳し、元来人間が気持ち悪がり、不快に感じる魔族の所作・排泄物・精液に対する感情はそのまま残した。

だから私はとても不快で、辛く、敗北感に満ちたまま、フーガ様にご奉仕するのだ。

ご奉仕するという行為事態のみを快感だと思い込まされながら。

だから死ぬことも生きることすら来ず、彼に奉仕している。

「もぐっ！」

フーガ様の精子が口の中に溢れた。

鼻から大切な精子が鼻水のように垂れてしまう。

喉の奥、鼻の穴、舌の上に煮詰めたお酢のような刺激が破裂した。

煮詰めたお酢というよりも、ワサビーという東洋の島国にしか無い香辛料を塗りたくられた感じだ。

痛い。

痛くて痛くてたまらない。

今すぐ唾内を洗浄したい。

でも口からおチ○ポを離したくない。

だってこんなに光栄なことは、他にないのだから。

洗脳されて植え付けられた擬似快感だと分かっているけど、おチ○ポをしゃぶる快感は手放せない。

だから私は唾内の刺激に耐え、宿敵である魔王フーガ様に笑われ続けるのだ。

長くなってしまったが、これがかつては金眼のアリアと呼ばれた私の“今”だ。

魔王フーガ様に関して私が知っていることは少ない。

八〇〇年前から、人間界と隔絶されたこの魔界を統べるお方だということ。

そして魔界から人間界を実質的に支配し、人間を生かさず殺さず、ぎりぎり生存できる限界まで搾取し、美しい女が生まれると、部下のモンスター達に喰わせる。

そのぐらいの知識しかない。

あと、私ごときの虫けらでは勝てないくらい強いということぐらいか。

最後に勇者オルクスのお話をしよう。

私が愛する、私のパートナー。

旅の相棒でもあり、幼なじみでもあり、勇者でもある。

もちろん男だ。

彼は、決して最初から強かったわけではない。

生まれ故郷の騎士団ではなんとか騎士団に入れる程度の、普通の剣士だった。

ただ、彼は強くなることを諦めなかった。

強くなり、世界を良くすることを義務だと感じていた。

いつも、いつでも、誰よりも、自分を追い込んで強くなった。

一緒に旅するパートナーに彼を選んだのはそのためだ。

いつか頭打ちになるであろうエリートよりも、可能性を持つ雑草のほうが背中を任せられる。

だから、私は彼を選んだ。

そして彼は旅を続け、成長を続け、強くなった。

事実、人間界の支配を強めるために魔王フーガ様が送りこんだモンスター軍団のいくつかは彼が一人で殲滅した。

たった一人で一国の軍隊とやり合って、撤退させたこともある。

ただ、それでも魔王フーガ様の魔城に近づいた時、直感した。

オルクスではダメだ。

足手まといにしかない。

・・・

まあ、私も瞬きする間に負けてしまったわけだから、彼を非難することは出来ない。むしろ非難される側だろう。

もしかしたら私は、オルクスに対する罪滅ぼしの気持ちもあって、魔王フーガ様にご奉

仕しているのかもしれない。

人間とは・・・そういう身勝手な生物だ。

だから、私のことなど放っておいてオルクスには幸せに生きて欲しい。

人間界で素敵な女性と過して欲しい。

そう願っていた。

だけど、あのバカは来てしまった。

魔王の城に。

魔王の玉座に。

必死で魔王フーガ様のおチ○ポをしゃぶる私のところに。

「おいっ！

フーガ！！！！

アリアから離れろ！」

「ああ？」

「・・・ダメ、来ないで。オルクス・・・」

私の、蚊の鳴くようなつぶやき声が途切れる前に、フーガ様はオルクスの心臓を引き抜いた。

そして勇者オルクスはかつての私と同様に、地下牢に放り込まれた。

私は、それを助けることも出来ずじままただフーガ様の戦闘後の精液は普段に増して、

キツイ香りと刺激があるのだなあと思いつつ、マ○コにそれを流し込んで頂いていた。

《第2章》

次に彼に会ったのは、二日後。

その時、初めて彼が地下牢で何をされていたのか知った。

女に・・・。

女に性転換されていたのだ。

いつも通りフーガ様の足元で土下座をしてから、おチ○ポの亀頭にキスをする。そして苦くて冷たいおチ○ポを舌から上に向かって舐め上げた時、私の後ろのドアが開いた。

白銀の鎧魔像と呼ばれる、まるで大国の衛兵のような威圧感のある鎧を着た実態の持たない影系のモンスターが、胸の大きく膨らんだ“女”を連れてきたのだ。

首輪にリード。細すぎてマ○コの膨らみが隠しきれない黒い女物のパンティ。

胸は大きく膨れている。

長い黒髪に、黒い瞳。

もしも髪と瞳が黒でなければ、私は彼女がオルクスだと理解できなかっただろう。

私の知らない間に彼は“女”にされていた。

顔はやや中性さを残してある。

あえてそうした可能性が高い。

胸がアレだけ膨らむのなら、顔だってもっと女らしく出来ただろうに・・・。

しかし、中性さはむしろ彼の場合美しく見えた。

勇者らしい精悍さが残っていて、少なくとも私には美しくみえた。

「・・・まさか」

「そうだ。」

そのまさかだ。

アリア。

こいつがお前の愛したオルクスだ。

お前と違い胸は大きめにした。

その方が性奴隷らしくあるだろう？」

「・・・じゃ、じゃあ・・・」

私はひとつ息を吞んでから、私の予想が間違えていることに期待した。

無論、期待は裏切られる。

相手は魔王フーガ様なのだから。

「お前たち人間の世界では戦争の後に、面白い儀式を行うな。

戦争で負けたら、いや。

正確には戦争を仕掛けた側が負けると、敗北した国家は王族を性奴隷として相手国に差

し出すのだろうか？

男は首を刎ね飛ばし、女は性奴隷にする。
なるほど。

よく出来たシステムだ。

こうしておけば、王権政治といえど勢いで戦争には突入しないからな。
俺も見習わせてもらおう。

アリアっ！

勇者オルクスっ！

貴様は女として俺の性奴隷になってもらおう。

お前ら人間が俺に攻めこんで来たのだ。

文句は言うまいな？

んん？」

もじもじと内股を擦ったまま、視線を斜め下に向けるオルクスのふくらはぎを白銀の鎧
魔像がムチのようなもので叩いた。

「ひぎっ！」

「どうした？

返事をしろ。

勇者オルクス。

まさか挑んでおきながら、負けたら知りませんなどと抜かすつもりではあるまい」

「・・・こ、殺せ。

俺はお、男だ。

い、今更命など惜しくない。

殺せっ！」

震える声でオルクスはそう答えた。

しかし私は知っている。

フーガ様はそんなことを望んでいないと。

殺すならとっくの昔に殺している。

彼をこんな形で生かしたのは、恐らく性奴隷にする以外にも何か目論見があつてのこと
だろう。

フーガ様は、頭も切れる。

もつととんでもない何かをさせる気・・・なのだろう。

「おい。

洗脳の方は、上手くやったのか？」

「は。」

お申し付け通り、マゾ基質を脳に組み込もうとしたのですが・・・」

「失敗か？」

「いえ。」

この男・・・」

「あ・・・言わないで・・・お願い・・・」

オルクスの言葉で、フーガ様は事情を察したようだった。
私もなんとなく分かる。

「この男・・・元々マゾヒストでございました」

「・・・いや・・・違う・・・違うんだ・・・」

「くつくつくつく。」

だからか？

俺は見えていたぞ。

お前がアリアと旅に出た時からずっとな。

どうして男の貴様がアリアのような、明らかにお前よりも優れた才能と実力を持つ女を
旅をするのか。

普通、騎士といえば女を下に見るものだろう？

なのに、なぜ？

答えがこれだ。

勇者オルクスはマゾヒストで、女魔法使いアリアに勝てない自分に酔っていた。

いつもアリアが活躍する場を見て、自分では絶対に勝てないと実感するたびに勃起し、
ズリセンこいていたというわけだ。

はあっ、はっはっはっはっ！！！！

情けない話だな。

貴様、それでも男か？」

フーガ様の言葉に私は、肩をビクッとさせた。

怖かったのだ。

フーガ様の言葉の威圧が恐ろしかったのだ。

普通の人間ならそう感じる。

オルクスもきっとそうなのだろう。

しかし、彼はそれだけではなかった。

「・・・おい」

「はっ」

フーガ様が指をくるっと回すと、白銀の鎧魔像はオルクスに後ろを向かせた。

恐らく魔法でオルクスの体を操っているのだろう。

オルクスは後ろ向きで立ったまま大股を開いて頭を下げ、両手を地面につけた。
細すぎるパンティーの脇からマ○コとアナルが見えた。
オルクスのあつたはずのチ○ポもタマも綺麗さっぱり除去されている。
痕跡さえ無い。

生まれた時から無かったかのように、完全に無かった。

「・・・ふむ」

太ももに透明な液体が漏れるように垂れていた。

汗とは違う。

汗よりも粘着性が高い。

そして何より出処がマ○コだ。

しかしその量は、汗と見まごうばかりの量。

そして、マ○コには白いゼリー状のもの。

私は最初、それが精液かと思った。

オルクスが誰かに犯されたのだと思った。

しかし勘違いだとすぐに気が付く。

フーガ様も初めて、女になったオルクスを見た様子だった。

せっかくの処女を雑魚モンスターが奪うか？

普通ならフーガ様にお目通ししてから、その是非が問われるはずだ。

つまり、あれは精液じゃない。

「・・・くつくつくつ。」

なんだ、もう逝っちまったのか？」

オルクスのお尻がフーガ様のお言葉に、ビクツと震える。

なんとも情けない話だ。

素直に元人間界最強の魔法使いとして、魔王と一騎打ちした魔法使いとして、かつての相棒を恥じた。

彼と一緒に旅したことを恥と思った。

彼は女にされて、宿敵にその変化を見られ、私にその姿を見られ、逝ってしまったのだ。
情けない。

女ならともかく・・・。

心はまだ男のはずだ。

勇者のはずだ。

それなのに・・・。

「う・・・うう・・・ううう・・・」

オルクスは大腿を開いて、マ○コとアナルがよく見える格好のまま泣いていた。どうやら魔法で縛られているものの、多少の自由は有るようだ。

泣く事ができるということは口がきけるということだ。

感情が吐露できるということだ。

それならば・・・。

オルクスも自分が泣けたことによって、それに気がついたらしい。

感情が吐露出来て、口がきける。

これは魔法の発動条件を満たしているということだ。

オルクスはマ○コの観察をされやすいポーズのまま、呪文の詠唱にはいった。

馬鹿っ!!!

真横に白銀の鎧魔像がいるじゃない!

そんな聞こえるような声で詠唱したら殺される!

この部屋はそもそも呪文がかき消される結果が敷いてあるのよ!

私がそう叫ぼうとした時、フーガ様は私の口に手を入れて、私を黙らせた。

「好きにやらせてやれ。

これが最後だ」

「うう・・・」

白銀の鎧魔像はフーガ様の御心を理解しているようで、あえてオルクスに最後まで呪文の詠唱を唱えさせた。

勇者のみが使える最強の魔法の詠唱を・・・。

「レ・ドルドっ!!!!!!!!!!!!!!」

しかし魔法は発動しなかった。

何も起こらなかった。

魔法がかき消された形跡はない。

そもそも魔法事態が発動しなかった。

「・・・え？」

「くあーはっはっはっはっ!!!!!!!!!!

勇者よ。

気が付かなかったのか?

お前はなあ・・・。

感じれば感じるほどに、レベルが下がっているのだよ！

その愛液は・・・っ！

お前が垂らすその愛液は・・・っ！

お前のレベルを吸ってから排出されるのだ。

そうなるように、そこにいる白銀の鎧魔像がお前を改造したのだ！！

今日ここに連れてこられるまでに地下牢で何回、逝った？

50か？

100か？

女の体になって、オナニーに励んだな！？

相当に励んだようだな！

くっくくくっく。

お前はもうそんな大層な魔法は使えんよ。

今日までオナニーを我慢すれば、呪文の発動だけならできたかもしれんのに！！！！

くあーはっはっはっはっはっはっはっ！！！！！！！！！！

フーガ様のお言葉に、白銀の鎧魔像も肩を震わせて笑っていた。

そして勇者オルクスは、絶望と恥をその表情に浮かべ、硬直していた。

そして私は、彼を見下げていた。

魔城の地下牢に閉じ込められて、オナニー三昧のマゾ勇者。

もはや彼と旅したことは恥ではなく、なかった事にしたい歴史だ。

過去に戻るなら・・・。

まだ彼を純心な勇者だと思い込んでいた頃に帰れるのなら・・・。

あの頃の私に教えてやりたい。

こいつはそんな男じゃない。

女にされた途端、オナニーに励むマゾ勇者だと・・・。

彼だって私と旅を共にしたのだから、恐らく私とそう変わらないレベルを持っていたはずだ。

私のレベルは128。

誤差も含めて、彼は100前後はあっただろう。

その全てが、愛液とともに流れ出てしまった。

私は完全にオルクスを見下した目で見ていた。

自分でもそのことに気がついていて。

オルクスは私と目が合うと、慌てて視線を逸らす。

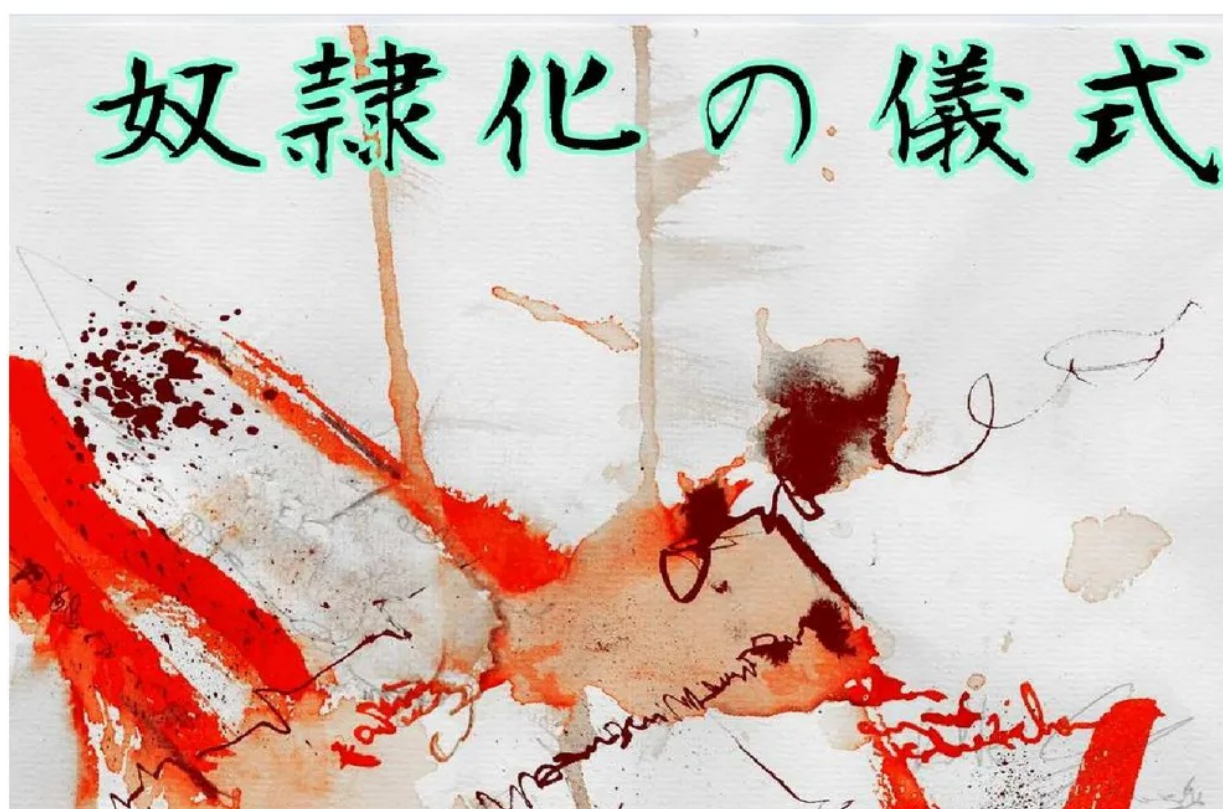
それが、いかに彼が本気でオナニーにふけていたのかよく分かる証拠だった。

彼は・・・。

いいや、彼女は・・・。

その場で泣きだしてしまった。

まるで親に粗相がバレてしまった子供のようになんて・・・。



《第1章》

そして儀式が始まる。

人間の世界と全く同じ儀式が・・・。

私も魔王フーガ様に同じ儀式を行って頂き、彼の性奴隷になった。
勇者オルクスも今から同じ目にあう。

「今の人間もえげつないことを考えるものだな。

我々とそう変わらんではないか・・・」

フーガ様は私の儀式の際、そう言った。

人間でありながらその言葉には・・・同意せざるを得ない。

ここで人間界の「王族の女が性奴隷に堕ちる儀式」について説明しておきたいと思う。
まず性奴隷に堕ちる女は、ご主人様となる相手（この場合相手が男とは限らない）の足元に土下座をして、敗北を認める宣言をした後、命乞いをする。

命を助けてもらう代わりに、性奴隷として働くことを誓うのだ。

この際の誓いは、魔法ではなく呪術によって構築されるので、魔力のない者でも誓いは有効となる。

誓いを破ろうとすると、その行為事態を肉体と脳が拒絶する。

ご主人様の命令無しでは自殺さえできなくなるのだ。

私のご主人様であるフーガ様に逆らえないのもそのためだ。

それに加えて、多くは事前に洗脳が行われる。

私とその典型だ。

事前に魔王フーガ様へのご奉仕こそが至高であり、光栄なことであり、私の存在意義の全て。

そう洗脳されているので、誓いの呪術は保険程度にしか意味をなさない。

せいぜい自殺・逃亡防止の役に立つ程度だ。

洗脳はごく簡単な縛りを設けることしか出来ない。

だからいかに人間の本質を問う洗脳をかけるが勝負となる。

誓いの呪術が完成すると、今度は性奴隷が自己の価値をご主人様に示す。

これも儀式の内だ。

具体的に言うと、性奴隷の多くは胸やマ○コやアナルの形を自己申告し、それが正しいか検分して頂くことになる。

女として・・・。

肉オナホとして・・・。

性液便所として・・・。

そして、その価値が自己申告と正しいか見極めて頂くのだ。

つまりは抱かれることになる。

セックスしていただくのだ。

事実私もそうだった。

この旅が終わったら、オルクスにもらってもらうはずだった処女は・・・。

魔王フーガ様に破瓜して頂いた。

その後はもう一度、土下座。

誓いの呪術が正常に作用しているかどうかを試すために、再度土下座をし、検分のお礼と再度の敗北宣言、そして性奴隷服従宣誓。

この際、反抗の意志がないかご主人様となる人間は試すことになる。

どんな屈辱的なことでも構わない。

むしろ屈辱的であればあるほど良い。

もしも性奴隷が屈辱を受けた際、反抗の意志を持っていると、誓いの呪術が作用し何も行動できなくなる。

そして頭の上に浮かび上がるのだ。

反抗の意思ありを示す、紋様が・・・。

私の時は紋様が浮かび、悔しさと敗北感に苛まされながら、魔王フーガ様の精液を飲みま
せていただくことになった。

何度も、何度も、何度も。

書物で読んだだけの知識だが、人間の男はせいぜい10回も精液を出せば、その日は打ち止めらしいが・・・。

魔族は違う。

100回でも、200回でも出続ける。

そもそも限界がない。

ましてや相手は魔王。

その量も、濃密さも、臭さも、全てが段違い。

頭に紋様を浮かべ、反抗の意思を示しながらのフェラチオはとてつもなく辛い。

しかもそれが終わらないのだ。

だから私は、フーガ様に奉仕することが光栄なことだと洗脳されたことは、ある意味で

ラッキーだったのかもしれない。

もしもそうでなければあの時、あの時点で自我が崩壊していただろう。

最後に付け加えておくが、儀式の中身、これらは全てはご主人様となる者の気持ち一つで内容が変わることが有る。

というか誓いの呪術さえマトモに作用しているかどうか分かれればそれだけで良いというご主人様もいるだろうし、じつくりねっとりしつこくしつこく儀式を執り行うご主人様もいるだろう。

あくまで儀式の意図は、ご主人様となる者と性奴隷となる者の立場の明確化にあるからだ。

無論だが、魔王フリーガ様はじつくりねっとりしつこくしつこく儀式を執り行うタイプのご主人様だった。

さあ。

長くなったが儀式の説明はこれでほぼ終わったはずだ。
オルクスの儀式の話を始めよう。

《第2章》

オルクスは魔法で体の動きをコントロールされているから抵抗なく、それでいて恭しくその場で土下座をした。

体の動きはどう見ても女のそれで、とても雅で、女の私から見ても美しいと思うものだった。

石畳に膝をつくと、弛むおっぱい。

大きなおっぱいの中で儂く自己主張する淡いピンク色の乳首。

男だった頃にはなかった美しい脚線美。

汗で輝く綺麗な白い肌。

そして全てが女のそれで、調和されていた。

魔法の下手な人間が彼の体をいじったのであれば、こうはならなかっただろう。

白銀の鎧魔像がそれを担当したのだろうか。

あのモンスターのレベルの高さを伺わせる見事な肢体だった。

「くっ！」

オルクスは何か言葉を発しようとしたのだが、すぐに諦めたようだった。

何を言っても無駄だと思い出したのだろう。

それでも声を上げてしまうのはまだ彼が、自分が勇者であるという自覚があるからだ。

そしてその自覚は、これから碎かれる。

代わりに、性奴隷として自覚を植え付けられるのだ。

女としての自覚を植え付けられるのだ。

白銀の鎧魔像はオルクスをリードで引いて、魔王フーガ様の足元に連れてきた。

オルクスは白銀の鎧魔像にコントロールされた人間特有の動きでゆっくりと、頭を地面にこすりつけながら芋虫のように地べたを這って、土下座をしたまま進んでくる。

それは本当に“地べたを這う”という表現がよく似合う姿だった。

頭の先が、フーガ様のつま先辺りまで来るとオルクスは静止した。

白銀の鎧魔像によって静止させられたという方が正確かもしれない。

とにかく止まった。

そして顔を上げないまま、言葉を発した。

いや、発するようにコントロールされた。

「わ、わたくし、オルクスは・・・む、無謀にも・・・」
「くっくっく」

媚び媚びに媚びた勇者オルクスの声は、もはや勇者の威厳など無く、可愛く媚を売るバニーガールか売女のように・・・もしもそれがオルクスでなければ、私もその媚っぷりを笑っていただろう。

魔王フーガ様と同じように・・・。

「む、無謀にも、ま、魔王フーガ様に挑み、このような無様な生き恥を・・・」

「そうだろうな。」

正に生き恥だ。

女にされた気分はどうだ？」

「・・・は・・・恥ずかしい・・・です・・・」

「ふん。」

それで？」

「・・・こ・・・これからは・・・女として・・・」

「性奴隷になりたいのか？」

「・・・は・・・はい」

「ダメだな。」

「貴様は死刑だ」

「そ・・・そんな・・・」

私はこの時、思った。

オルクス。

フーガ様は、貴方の命を取りたいわけじゃないのよ。

あなたに生き恥を晒させて、笑いたい。

でなければ、わざわざ生きたまま貴方を女に改造したりはしないわ。

貴方は生きる義務があるのよ。

それに気がついて・・・と。

私の考えが通じたかは、分からない。

しかし、オルクスはそう有るようにコントロールされたのか否か。

震えていた。

震えながら、再度オルクスは口を開いた。

「・・・生きたい・・・です・・・」

「くっくっく」。

そうだろうな？

人間の人生は短い。
死に急ぐのは辛かろう？」

もちろんこれは魔王フーガ様の言い分というか魔族の見た人間観であって、オルクスはそんな人間ではない。

むしろ今すぐ死にたいと考えているはずだ。

死んでいなくなってしまうほうがマシだと考えているだろう。

しかしそれは出来ない。

白銀の鎧魔像が彼をコントロールしている。

自殺は出来ない。

それどころか、魔王フーガ様の思いに即して行動しなければならない。

自身の生き方とは違う言葉を、自身の思いとして発言しなければならない。

「・・・はい・・・。」

「・・・はい・・・。辛いです・・・。」

「・・・とても、とても、辛いです・・・。」

「・・・だから、生きたい・・・です・・・。」

「ふむ？」

「だから、俺の奴隷になると？」

「・・・はい。」

どうかわたくしを魔王フーガ様の性奴隷として、お使いください。

敗北者、オルクスにどうかご慈悲を・・・。」

オルクスは、“それだけ”は許されたのか、泣いていた。

泣きながら、白銀の鎧魔像の思うがままに、自身の思いとは逆の言葉を媚び媚びに媚びながら、言葉を発していた。

私の知る限り、人間であそこまで哀れに見えたのは彼が初めてだった。

気がつくのと、私は哀れんで、心配で、それでいて蔑んで・・・彼を見ていた。

「お前は どう思う？」

「金眼のエリアよ」

不意に話を振られて私は、えっ・・・となってしまうが、すぐに魔王フーガ様が望むであろう言葉を用意した。

心の何処かでそれも奉仕のウチ、光栄なことと思うように感じる洗脳が働いたのだろう。

「はい。」

殺すのはいつでも出来るかと・・・。

女体化させておいたのは、何か“使い処”があつてのことでは有りませんか？」

「くっくくく」。

お前は賢いが馬鹿だな。

俺は、こいつを生かすか殺すか。

「お前に決断を任せたのだぞ？」

「ではお答えは決まっています。

使い処で使ってから、殺す。

それで良いのでは……？」

魔王フーガ様は肩を揺らして笑った。

白銀の鎧魔像も肩を揺らしている。

「かつてのパートナーにこうまで言われては、立つ瀬がないなあ？」

勇者オルクスよ。

良からう。

貴様は今日から俺の性奴隷だ。

無論、女の性奴隷としてだがな？

「さあ、人間の習わしに沿って申告しろ」

女の性奴隷は、自分の価値がいかほどかご主人様に報告しなければならぬ。

これも人間の世界の習わしだ。

守ろうとした人間の世界の慣習で、陵辱される。

それも男としてではない。

勇者としてではない。

女として。

性奴隷として。

敗北を受け入れさせられる。

私は魔王フーガ様がどうお感じになるかと、勇者オルクスがどう感じるか以上に、自分がそれを観ることが出来たのが、なぜか快感だった。

オルクスは動きこそ制限されているが、口だけは自由にされたようだ。

私がそれを知ったのは、オルクスが今までの発言をひっくり返したからだ。

「殺せえええええつ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

女として奉仕だどっ！？

性奴隷にしてやる！？

殺せっ！！！！

貴様に奉仕するくらいなら、八つ裂きにされたほうがマシだっ！！！！！！！！！！

「・・・・・・・・」

普通こういう時よくありがちなのは、魔王が勇者を「ならば死ね」と言って殺す話だ。

しかし、魔王フーガ様はそれをなさらなかった。

代わりに私を腰の上に載せ、私のマ○コに青黒くそり立ったチ○ボを挿し込んだ。

「うぐううっ！！！！」

私が痛がることなどお構いなし。

元来オルクスが挿入するはずだったマ○コの肉を裂きながら、魔王フーガ様のおチ○ボが侵入してくる。

「どうだ？」

アリア。

気持ち良いか？」

実際の所、痛かった。

少しも気持ち良くなどなかった。

全然、快感には思わなかった。

でも、私はこう答えた。

「・・・・最高・・・・です・・・・・・」

自分でも驚く程湧ききつていたし、甘ったれた声だった。

それは正に、男に抱かれる女の声だった。

私は心の奥底まで、洗脳されているんだなと理解せざるを得なかった。

気持ち良くなんか無いのに、顔が蕩けてしまう。

嬉しくなんか無いのに、胸がキュンとなってしまう。

光栄に思ってしまう。

目の前にはいつか処女をあげようと思っていたはずの、勇者オルクスが土下座しているというのに・・・・。

あえぐ私を横目に白銀の鎧魔像が動いた。

オルクスのお尻に手を入れてまさぐる。

アナルを探しているのだろう。

見つけたようだ。

白銀の鎧魔像は、オルクスのパンツをずらすと、白銀で出来た中指をオルクスのアナルに入れて、中をかき回した。

そして私の聞いたことのない言葉で詠唱を行い、呪術を発動させた。

悪魔文字で出来た紋章が浮かんで、オルクスのアナルに入っていく。

それを私は蕩けて、熱い吐息を吐きながら見つめていた。
魔王フーガ様の突き上げる腰の振動に耐えながら・・・。

「顔を上げよ。」

顔を上げ、望まれることをせよ。

それが女の喜びである。

男の望むままに行動できる事こそ女の喜びである」

白銀の鎧魔像はそう言った。

そう言っ、指をオルクスのアナルから引き抜いた。

オルクスは痙攣したまま数秒間動けなかったが、自身の首が自由にされたと分かったらしく、ビクビクと怯えながら顔を上げた。

視線の先には、見下ろしながら嘲笑う魔王フーガ様。

そして魔王フーガ様に犯され、嬌声を上げる私。

私達の視線が交差した瞬間、白銀の鎧魔像がアナルに指を入れてかけた呪術が発動した。

あれはっ、洗脳呪術だ！

私は勘違いしていた。

洗脳魔法じゃない、洗脳呪術だ。

恐らく私にかけられたのも同じだろう。

だとすると私にかけられた洗脳は、私には解けない。

オルクスにかけられた洗脳もだ。

私は魔法使いであつて、呪術使いではない。

魔法と呪術は、漁師と猟師ぐらい違う。

完全な専門外だ。

私は喘ぎ声を大声で上げながら、絶望した。

こんな呪術は聞いたこともない。

おそらく人間でこれを解くことの出来る人間はいないだろう。

逃げ出したとしても・・・。

万が一魔王フーガ様を殺せたとしても・・・。

私は魔王にご奉仕したくてたまらない一生を送るのだ。

魔王にご奉仕することが光栄だと思つて生きるのだ。

理解したくない現実を今・・・、理解してしまった。

・・・では。

では、オルクスは？

結論から言うと、私と同じように蕩けながら、絶望しながら、私達を見つめていた。そしてフーガ様と私がオルクスの目を見ていることに気がついたらしく、恥ずかしそうに視線を逸らした。

まるで、初みな少女が初恋の男の裸を見たように。見たいけど見ていることを悟られたら恥ずかしい。そんな顔をしていた。

私から見てもそれは、女の表情だった。

オルクスにかけられた洗脳は、フーガ様を嫌悪しながらも、フーガ様に恋い焦がれるといったものだろうか？

それとも他の何なのか？

私には分からない。

ただ分かっていることが1つだけある。

オルクスは“そういう系統”で洗脳された。

「ま、魔王・・・フーガ様・・・」

性奴隷オルクスは、胸に自身があります。

わたくし・・・おっぱい大きいです。

それから・・・アナルも戦闘馬鹿でしたので、締りがすごく良いです。

あと、あと・・・♥

あと・・・マ○コはまだ良くわからないけど、沢山♡愛用下さい♡」

オルクスは瞳を潤ませ、頬を紅くし、口からよだれでも垂れそうなほどに蕩けながらそう言った。

打倒しなければならないはずの、殺さなければならないはずの、魔王フーガ様にそう言った。

「ふん。」

洗脳後ではいささかつまらんですが、まあ仕方があるまい。

アレの為には仕方がない。

しかし、そうだな。

オルクスよ。

土下座したままではつまらん。

「立って、その自慢の胸を見せてみる」

そして立ち上がると同時に腕を頭の上で組み、乳首もおっぱいも隠さずに魔王フーガ様

まるでミノタウロス（牛のモンスター）のメスのような乳だな。

アリア。

「あひつ……！！！！」

魔王さまあああ！！！！

裂けちやううううつ！

あはあああつ……！！！！！！

仰るとおりですううううつ……！！！！！！！！！！

おっぱいがちっぱいと、能無し・価値無しですううう……！！！！！！！！」

「そうか？」

「ぐきゅんぐん」――

いぞ。

男を見て、服従を示すのは良い女の証拠だ」

私とオルクスの体を見比べて、フーガ様はいたく満足なさったようで声を上げて笑った。そして、人差し指で地面を指す。

それはオルクスに、「横分は終わりだ。もう一度土下座をしろ」そういうジェスチャーだ。

薄けた顔のままのオルクスは、そのまま言われたとおりに土下座をした。

薄けたままの床に鼻先をつけたオルクスはもう震えていない。

性奴隷として認められたことが嬉しい。

きつとそう感じているのだろう。

白銀の鎧魔像にそうなるように、洗脳されただろうから。

あるいはそうなるように洗脳されておらず、精神をすり潰すような屈辱にまみれているか……。

どちらでもいい。

私もオルクスもやれることなど何もないのだから……。

魔王フーガ様はどこまでも人間の儀式を踏襲するつもりなのだろう。

土下座したオルクスの頭の上に足を下ろした。

「さあ言え。

服従の言葉を……」

「ほ、本日より……。

魔王フーガ様のメス性奴隷にさせていただきました、オルクスでございます。

生涯をフーガ様に捧げ……。

男を忘れ……。

勇者を忘れ……。

女として。

性奴隷としてご奉仕させていただきます存じます。

未熟な人間のメスでございますが、どうぞご愛顧くださいませ」

いつからだろう？

誓いの呪術は完成していたらしい。

魔王フーガ様に対する勇者オルクスの服従の誓い。その呪術が……。

勇者オルクスの頭の上に浮かび上がった。

反抗の意思アリを示す、紋様が……。

誓いの呪術が完成した後、誓った者が反抗の意思を持つと頭上に浮かぶ紋様。オルクスの頭上にそれは浮かんだ。

そして嘲笑った。



紋様ごと魔王フーガ様はオルクスの頭を踏み直し、足でもみ消すように踵を回した。

嬉しそうに。

とても、とても嬉しそうに笑った。

「全ては、予定通りに・・・。

伝承通りに進んでおります」

私が逝くと同時に、白銀の鎧魔像はそうつぶやいたのを私は、ぼうつとする頭で聞いていた。



搾乳。

我が母国でも乳牛は一般的だ。

私とオルクスの生まれ故郷では、牛乳にヨーグルトを混ぜたビルクソを飲む。

子供なら誰もが好きだ。

牛乳だけでは腹を壊す者もまれにいるが、ヨーグルトを混ぜたビルクソだと不思議と腹を壊さない。

さて、なぜ私がこんな話を始めたかというと、魔王フリーガ様から新しい仕事を仰せつかったからだ。

それはつまり、私とオルクスが魔界の乳牛第一号になるということだった。

「人間は子袋にもなり、肉ともなり、乳牛にもなる」

白銀の鎧魔像はそんなことを言っていた。

確かにそのとおりかもしれない。

魔族は人間を犯すことが出来る。

孕ませることも出来る。

つまりそれは、人間に魔族の子供を産ませることが出来るという意味だ。

・・・肉・・・

ここに関して、改めて新しい言葉は必要ないと思う。

極めて簡易な話だ。

殺して喰う。

生きたまま喰う。

ただそれだけだ。

人間は人間を食べる習慣などほとんど全くないが、魔族の間では敗者を食べて良いという風習がまだまだ色濃く存在する。

喰うために狩る。

相手が野生動物か、同じよう文化を持つ動物か・・・。

きつと彼らにはその程度の差しか無いのだろう。

そして今回の乳牛である。

人間世界では牛乳はごく一般的な飲み物だが、魔界では違うらしい。

なぜなら牛が居ないから・・・ではなく、魔族が牛の乳を飲めないからだ。

牛乳が体に毒となるらしい。

だがしかし、それはあくまで牛の乳の場合。
人間では・・・？

搾乳時、魔王フーガ様はおそらく私達のお乳が飲みやすいものなら、人間界の女を多く献上させ、乳牛にしようとお考えなのだろう。

そのくらいのことでは為さるお方だ。

多分、私達はそのための・・・実験材料。

私とオルクスは地下牢ではなく、牛小屋を模した地下室に移動させられた。

白銀の鎧魔像に言わせれば、「搾乳の間」だ。

そこで私とオルクスは並んで、いわゆる立ちバツクのポーズで拘束された。

手首と首を並べて鉄の枷で拘束され、足はなんの悪戯かホルスタイン柄のニーハイを履かされた。

乳首には人間界でも乳牛につける搾乳器。

真空状態で振動を起こし、子牛が乳を吸っているのと同じ感覚が常に生じるように出来た搾乳器だ。

実際、これはかなりの衝撃だった。

逝きたくても逝けない歯がゆさを維持する気持ちの良い振動・・・。

逝つたら止まって欲しいのに止まらずに、乳をネダリ続ける、まるで誰かに欲せられているかのような快感。

正直魔王フーガ様に乳首をいじられるよりも、肉体的な快楽は上だった。

単純に気持ち良かった。

そして、子供を産んでから一定の期間しか出ないはずの母乳が・・・、出産経験の無い私と、元来女でさえ無いはずのオルクスの乳首から・・・出た。

どぴゅどぴゅと音をたて、搾乳器に母乳が噴射された。

もしかしたら、そうなるように白銀の鎧魔像が何かの魔法をかけたのかもしれない。

そもそも子供を生んだかどうかなんて脳に誤解をさせれば良いだけなのだから、難しくはないだろう。

カタカタと揺れる搾乳器の端に繋がれたチューブから母乳が流れ出てゆく。

私はそれが嫌で嫌でたまらなかった。

まるで、家畜のようではないか・・・。

敗北し、性奴隷にはなったが、家畜になった覚えはない。

ふと横を見ると、オルクスが隣で同じポーズで拘束されていたのだが、正直私は彼の、その姿に見入ってしまった。

大き過ぎるおっぱい。

大きなおっぱいにはやはり沢山お乳が詰まっているのだろうか。

私よりもお乳の“出”が良いように見える。

実際、相当に良いだろう。

私はチューブに何とかお乳が流れているのに比べて、彼はチューブに流れ出る量が追いつかないで、搾乳器に常に一定量溜まっている。

そのせいで、搾乳器が重いのかオルクスはつらそうな顔をしている。

ただでさえ真空によって吸い付かれているような感覚になるのに、その上母乳の重みで引っぱられるのは辛かろうと思う。

しかも巨乳だから、おっぱいそのものの重みも有る。

それだけじゃない。

私はおっぱいがないことがコンプレックスだったが、どうやらオルクスの場合はその逆のようだ。

女を主張するおっぱいが、どうしようもなく恥ずかしいようだ。

事実、私が彼のおっぱいを見つめると恥ずかしそうに視線を逸し、内股をこすらせていた。

それは・・・私にとってムカつく光景だった。

女の私よりも明らかに女らしい仕草。

女らしい肢体。

大きいおっぱいを見られて恥ずかしいという女らしさの証明は、胸の小さな私には出来ないことだったから。

私が欲しくて欲しくてたまらない「女らしさ」そのものだったからだ。

それをオルクスは、屈辱だと考えているのだ。

それがムカついて、仕方がなかった。

搾乳器の振動が止まった。

これで、今日の搾乳は終わりなのだろうか。

私がそう思っていると、白銀の鎧魔像が突如私のむき出しになったままのお尻を平手で叩いた。

「あぐくううっ!!!!!!???」

「これしか出ていない。

オルクスはもつと出しているぞ。

さあ、出せ」

スパニングは1度では済まなかった。

・・・2度、3度、4度・・・。

白銀で出来た手のひらで叩かれているので、たまらなく痛い。

手のひらの形をした鋼鉄の鞭でお尻を叩かれているのと同じなのだから、当然だ。

後ろから押し込まれるように叩かれるのでどうしても、拘束している鉄棒に首や手首が当たって痛む。

私は必死で、踏ん張って痛みを耐えていた。

すると・・・お乳はさつきよりもたくさん出てしまった。

そう。

出てしまった、という表現が正しい。

私は出すつもりなど無かったのに。

こんなことで多く母乳が出るなんて、嫌だったのに。

でも、・・・出てしまった・・・。

オルクスの出した量と同じだけ私が母乳を出すまで、スパニングは続いた。

しかも、最後に・・・。

私はオルクスの見ている前で、白銀の鎧魔像にお礼まで言わされた。

白銀の鎧魔像の魔法によって、コントロールされるがままに。

「お乳の出が悪いバカ牛に、お尻叩きの懲罰ありがとうございます・・・。
お陰で一杯お乳が出て、バカ牛のエリアは、嬉しゅうございます・・・。」

《第2章》

翌日も。

その翌日も。

私とオルクスは搾乳された。

そして搾乳後はそれぞれ別々の地下牢に繋がれ、別々の時間に魔王フーガ様に「奉仕をさせていただいた。

なぜ私達二人を分けたのかはわからない。

もしかしたら、オルクスは「奉仕そのものをさせてもらえていないのかもしれない。

私だけがそうさせてもらえているのかも・・・。

私が彼も「奉仕しているに違いない」と思った理由は、ただひとつ。

時折聞こえる、彼のむせび泣く声だ。

しかし、もしも「奉仕していないのなら・・・だ。

彼は何をしているのだろうか？

私はオルクスがどうしているかよりも、もっと早く解決したいことがあった。

先だって話した、搾乳の件だ。

私のお乳の出が悪いせいで、私は毎日オルクスの見ている前で白銀の鎧魔像から尻叩きを受けていた。

一定量に達するまでずっと・・・ずっとだ！

これが嫌で嫌でたまらなかった。

精神的に参ってしまっていた。

とにかくこの悩みを解決しないことには、先に進めそうになかった。

脱獄するにしても。

逃亡し、立て直しを図るにしても・・・。

とにかく今のこの状況を解決したかった。

できれば、私のチツパイも解決しておきたい。

これ以上オルクスに、男だった者に女を魅せつけられるのは我慢ならない。

そこで、魔王フーガ様にオネダリすることにした。

どうせダメ元だ。

痛みさえ感じる刺激臭のあるおチ○ポを舐め舐めしながら、私はこう切り出した。

「お乳の出が悪いので、オルクスに馬鹿にされているような気がするんです。

どうか私のお乳の出を良くしていただけませんか？」

魔王フーガ様は眠そうにしながら私の頭を鷲掴みにし、笑った。

「なんだ。」

人間のメスは嫉妬深いと聞いたが、お前もご多分に漏れずか。

3歩下がれ。

下がってケツをこちらに向ける」

「・・・はい。申し訳ありません」

私は云われた通りにした。

きつと魔王フーガ様からもスパンキングを受けることになるのだろう。

そう思ったからだ。

だから、フーガ様が叩きやすいように、お尻をできるだけ高く・・・。

それでいて叩きたくなるように、頭を床に付くほど下げた。

こうすることでお尻が私のメインになるような気がしたからだ。

しかし、魔王フーガ様は叩いたりしなかった。

代わりに私の尻を眺めて、こうおっしゃった。

「だいぶ、叩かれたな。」

そろそろケツを叩かれ慣れただろう？

逆にお前はオルクスのケツを叩けるか？」

「えっ!？」

私はまさか自分がこの期に及んで誰かのお尻を叩くことが有るとは思っていなかった。

だから、何を言われたのかよく理解できなかった。

「人間の女の世界は嫉妬の世界で渦巻いている。

しかし、それらは上下関係を明確にすることで和らげられる。

これは人間世界の、王族が持つ後宮の仕組みだったな？」

「はい。」

仰るとおりです」

マ○コのうずきを感じながらお尻を差し出したまま、私はフーガ様に返事をした。

フーガ様のお言葉は何処にも否定するべきところが無かったからだ。

王族の後宮、つまりはハーレムにおいて女の上下関係は必要不可欠だ。

正妻↓側室↓妾↓女中妾。

各国に寄って言い方は違うがおおまかに言ってこの順で上下関係が決まっている。

生まれや顔立ちや、主人に気に入られているかどうかで順位が異なるらしい。

特筆すべきは必ず順位通りに、ご主人様から寵愛を受ける点だろうか。
そしてもう一つ。

順位が上の者は下の者に懲罰を与えて良いという点。

正妻はハーレムの女全てに、懲罰を与えることが出来る。

側室は、正妻以外の女になら・・・。

妾は、女中妾なら・・・。

女中妾は、残念ながら誰にも与えられない。

ただ懲罰を受けることしか出来ない。

そういう仕組みになっている。

つまり魔王フーガ様が仰りたいのは・・・。

「私がオルクスに・・・？」

「そうだ。」

お前がやれ。

いいな？」

是非もないことだった。

オルクスを罰するなんてと思う一方で、オルクスのお尻を叩けると思っただけで体がゾクゾクした。

嬉しかった。

早くそれを試したかった。

そして、翌日。

私のお乳の出は相変わらず悪かった。

しかし白銀の鎧魔像はそのことには特に触れず、私だけ鉄棒から自由にした。

いつもならありえない光景にオルクスが目丸くする。

普段なら今頃アリアは、お尻叩きをされているはずなのに。

そんな顔をしている。

「今日から変わったのよ」

私はフンと鼻を鳴らしてから、オルクスにそう言った。

オルクスはなんのことだかわからないといった顔をしていたので、私は意地悪く教えてあげることにしたのだ。

ここが魔王フーガ様のハーレムだということに。

そして、私と貴方は、あの憎つくき魔王フーガ様の・・・慰み者なのだと。

「ふふん♪」

私は自分でも驚くほど下品に笑いながら、オルクスのお尻を指で撫でてみた。ハリがあり、汗が美しく光る、女のお尻。とても元男とは思えない。

オルクスは足を開いているので、おマ○コも丸見えだ。割れ目も、アナルも・・・。

ほんの気まぐれで、今度はオルクスのマ○コを指でなぞってみた。一気に周辺の筋肉が収縮してゆく。

「気持ち良いんだ？」

私の問いかけにオルクスは何も答えなかった。

ただ、アナルがヒクヒクと痙攣している。

オルクスのマ○コを初めて、それもこんなにまじまじと見つめてみたが、ソレは白くて美しかった。

私のそれよりも柔らかく、くばあと開きやすいような気がする。まさに、ぷにぷにの触感だ。

「ああ、そうか。」

オルクス私よりも脂肪が多いのね？

だからこんなに、プニプニなんだ？」

私はオルクスが私よりも太っていることが嬉しかった。

私のほうが優っている所を見つけた気がして、嬉しかった。

だからだろうか？

彼のアナルに指を入れて、（マ○コに指を入れるのは憚られた。あれは魔王フーガ様のモノだから・・・）上の肉をホジホジと指でほじくる。下つ側もホジホジと指先でほじくってみた。

アナルの奥のコリコリしているところが男の性感帯。

そう書物で読んでいたから、そこを責めようと思ったのだ。

ただ、どんなにほじくってみてもソレは見つからなかった。

考えてみれば当たり前だ。

前立腺は男独自のものであって、女には無い。

だからいくら探しても見つかるはずがないのだ。

オルクスはもう・・・男なのだから。

「なんだあ、つまんない・・・のっ！」
「ぐがあっ！」

私は言い終えるか否かの所で彼のアナルから指を引抜き、そのまま彼のお尻を叩いた。思いつき。

なんの遠慮もなく。

私の手の方が壊れてしまうのではないかと、叩いた瞬間不安になるくらいに思い切り。だから私自身も手がすごく痛かった。

でもオルクスはそうじゃない。

お尻の痛さとか熱さとかむず痒さだけじゃない。

どうしようもなく襲ってくる、「相棒だった女にお尻を叩かれた」という現実。それも魔王フーガの女として。性奴隷として。

お尻ペンペンをされたのだ。

屈辱とか、悔しいとかそんな言葉では言い表せるはずもない。もっと複雑な感情が、脳の中に溢れているはず。

「そーらっ！」

もう・・・1発っ！」

「ひっっ！」

私が与えた一発は、オルクスの体の芯を捉えたらしい。

オルクスは頭まで一気に前のめりになり、鉄枷に首と手首を突っ込んで皮膚を傷める結果となった。

背中越しに見ても、彼の手首が青くなっているのが分かる。

「もうオシマイ？」

まだ我慢できるよね？」

「ま、待ってっ！」

更にもう1発。

私は彼のお尻を叩くたびに実感せざるを得なかった。

男のお尻としては柔らかすぎる。

どう見ても女のソレだ。

いや分かっていたはずのことなのだ。

彼はもう “彼” とは呼べない。

“彼女” なのだと。

しかし、頭の中では認めていなかった。

それなのに……。

それなのに実感してしまった。

彼のお尻の柔らかさは女のソレだと……。

彼のおマ○コから流れ出る透明な液体と白い濁りは、精液ではないと。
愛液なのだと。

私は、今更ながらフーガ様が疎ましく、憎く思えた。

だが、それでも……。

私とオルクスは奉仕するしか無いのだ。

魔王フーガ様の性奴隷として。

メス奴隷として。

そしてお乳を絞られる……メス牛として。

「……どうした？」

白銀の鎧魔像が突然静止した私に声をかけた。

反逆を恐れたのか、このモンスターが自己の防御力を上げる魔法を発動させてから声をかけたことぐらい私だって、気がついている。

でも私は、この状況で逃げられるとは思っていない。

ただ、耐えているだけなのだ。

オルクスが女にされてしまったという事実。

オルクスともども負けてしまったという現実。

少しくらい……。

少しくらい……泣かせてくれてもいいじゃない。

そう思ったら、私は声を上げて、……泣いてしまった。

目の前の真つ赤なお尻のオルクスの姿を悲しく思いながら。

こつ恥ずかしい格好のまま、オルクスのお尻を叩いている自分に絶望しながら。
子供のように泣いてしまった。

「……どうやら、下の者への懲罰は苦手なようだな……」

白銀の鎧魔像はそう言うと、私を再び搾乳のための鉄棒に嵌めた。

傍から見れば私は自分から、鉄枷に嵌まりに行ったように見えただろう。

しかし、もはや私にソレをするだけの気力・精神力はなかった。

白銀の鎧魔像の魔法が無ければ一歩だって動けずに泣いていただろう。
今更ながらに。

本当に、今更ながらに。

私は実感したのだ。

負けたのだと。

これが敗者の、行く先だったのだと。

女は性奴隷に。

男は女に変えてから、性奴隷に。

私はヒグヒグと子供のように泣きながら、搾乳を受けた。

オルクスと同じくらいにお乳が出るまで。
ずっと。

・・・・・・・・ずっと。

散々泣いたあの日以降、私は妙に元気だった。

吹っ切れたのかもしれない。

臭くてまずい地下牢の食事も喉を通るようになったし、逃亡計画も練り始める事が出来た。

そしてなぜか・・・、オルクスのお尻もバンバン叩けるようになった。

私がオルクスのお尻を叩くその様を見て白銀の鎧魔像は、・・・。

あまりのリズミカルさに・・・。

あまりの元気の良さに・・・。

肩を揺らして笑っていた。

面白かったというよりも、無様すぎて笑えたのだろう。

喜劇を演じる芸人があまりに笑いを取れなかった時、自虐やら無様やらを晒して無理矢理笑いを取るのを見てしまったような、虚しさが私の心にはあった。

だからだろうか？

オルクスの意志や体の状態など一切無視して、私はただひたすらに叩き続けた。

ただただ叩いて、叩いて。

オルクスのお尻を真つ赤に腫れ上げた。

手が触れそうになっただけで、オルクスのお尻が熱を帯びているのが分かる。

いやまさか・・・。

そこまで叩いただろうか・・・。

いや、叩いたのかもしれない。

でもこんなに？

ああ、そうか。

そうだった。

オルクスは1回逝くたびにレベルがひとつ下がるのだった。

だとすれば今彼のレベルはいくつなのだろう？

勇者のみが使える最強の魔法『レ・ドルド』が発動しないレベルまで堕ちたのは既に立証済み。

だとすると・・・。

「オルクス。

貴方、今のレベルは・・・？」

私の問いかけにオルクスは「あ、いや・・・その・・・あの・・・」とまごついたまま何も答えなかった。

その姿だけで十分私は、彼が地下牢で一人何をしているか理解できた。

馬鹿な男。

あれからまたオナニーしたのか。

さんざん笑われたのに・・・。

そんなに女になってからのオナニーが楽しいか・・・。

私は怒りのあまりオルクスのレベルがどれだけ下がったかや、そのせいでどれだけお尻の肉体的防御力が下がったかなどと一切気にしなくなった。

怒りにかまけて尻を叩いた。

私はこんなに絶望しているのに・・・。

この男女は・・・、元勇者は・・・、相変わらずオナニー三昧なのか。

私は、決して直接打撃が得意なタイプじゃない。

武器に魔力を込めて、多少の威力向上を図るのがやっとだ。

でも・・・。

それでも・・・。

魔力を精一杯手に込めて。

オルクスのお尻を叩き続けた。

お尻が全面的にサーモンピンク色になるまで。

お尻が濡れて、肉が波打ち、オルクスが泣きわめく。

母親にお尻を叩かれる女兒のように。

肉が波打った振動で汗が飛び散り、痛みをこらえきれないオルクスの足がバタつく。

私はそれでも気にせず叩いて、叩いて、叩きぬいた。

途中からその傾向に気がついていていたのだが、なぜかお尻叩きを終えるか否かの頃から、オルクスはお乳の出が悪くなってしまった。

それは肉体的な問題かもしれないし、精神的な問題かもしれない。

とにかくお乳がほとんど出なくなってしまう。

多分、私よりも少ないくらいだ。

「くっくっくつ。」

いいじゃないか？

何を躊躇う必要がある？

メスはメス同士潰し合え。

生き残った者だけが、正しかったというだけだ。

正しさは邪悪であり、えげつないものだ。

人間世界の王族とて、敗国の女は性奴隷にするのだろうか？

何が違う？

潰し合え。

殺して、殺して、殺して。

殺し抜いた先にしか、安寧は無い」

振り返るとそこには、魔王フーガ様が居た。

わざわざこの地下室までいらしたのだ。

この牛小屋を模した、小汚い地下室に。

醜悪な魔力を隠そうともせずにニヤニヤと笑いながら、魔王フーガ様は私を見ていた。

「おい」

「・・・は」

白銀の鎧魔像は私を魔法でコントロールした。

いつもの通り、鉄枷に首と手首を嵌めて固定する。

これで私はもう逃げられない。

同じポーズでオルクスも震えている。

白銀の鎧魔像はいつもの通りに、搾乳器を私の乳首にも付けた。

どうやら魔王フーガ様は私とオルクスの搾乳姿を見に来たらしい。

しかし、この予想はすぐに間違いだと理解することになった。

それはなんの前触れもなく、搾乳器が振動を始めたのと同時に、私の中に侵入してきた。

つまり、それとは魔王フーガ様のおチ○ポ。

マ○コが狭くて、痛くて・・・。

今更何をしてもこの痛みはずっと尾を引くだろうと、一瞬で理解できるほどの強い痛み。

痛みそのものがマ○コの中に入ってきたような感覚に陥ってしまう。

あまりの痛みには私は声を上げてしまった。

悲痛を叫んだ。

そう。

私は確かに悲痛を叫んだはずなのに、・・・出た声は嬌声だった。

気持ち良さを示すメスの声だった。

もしも・・・。

もしもの可能性けど・・・。

勇者オルクスが地下牢でオナニーに励んでいたのは・・・。

脳がより強くあろうとしたからではないだろうか？

自分では、今の自分では勝てないことを知り・・・。

より強くなろうと肉体か脳が欲した結果、洗脳で真逆の事をしてしまった。

つまりは近けば近くほど、レベルが下るオナニーに肉体が没頭してしまった。

私にかけられた洗脳と同じ洗脳をオルクスが掛けられていたのなら・・・。

・・・あり得る。

十分にあり得る。

騎士団に居た頃から強くなることを諦めなかった、オルクスだ。

だから私は、彼を相棒に選んだのだ。

ああ。

なんてこと・・・。

私は、この絶望的状况下で・・・。

唯一努力を続けていた勇者を信じられず・・・。

オナニーにふけていたことを・・・。

責めてしまった。

蔑んでしまった。

私は絶望するだけで、何も考えずに、フーガ様にご奉仕するだけだったのに・・・。

ああ。

女は・・・。

これだから女は・・・。

自分勝手に、馬鹿な生き物だと言われるのよ・・・。

その通りだわ。

私は・・・自分勝手に馬鹿な女です。

すみません。ごめんなさい。

どうぞ・・・罰して下さい。

魔王フーガ様が骨ばった硬い腰を、私のお尻に打ち付ける。

固く尖った、人間ではありえない硬さの鋼鉄にも似た感触のおチ○ボがマ○コの奥、子

宮どころか卵巣まで、無遠慮に、機械的に打ち付けられる。

脳には痛みと気を失いたい衝動がミチミチと音を立てながら、迫ってきた。

それが“光榮”でたまらない。



「・・・褒美だ。」

「・・・受け取れっ!!!!!!」

魔王フーガ様はそう言うのと、私の中に・・・。
盛大に子種を噴きつけた。

おマ○コの中よりも、おマ○コの外に垂れている感覚の方がクリアーに感じる。
多分、フーガ様の精液の刺激でマ○コの中が麻痺してしまったのだろう。

冷たくて痛みさえ感じる刺激、そしてこのたまらない臭さ。

マ○コの表皮から太ももに垂れるだけで、これだけ感じるのだ。

マ○コの中の肉には、激烈過ぎるのだろう。

結果として、麻痺してしまったのだ。

脳が痛覚その他をシャットアウトしてしまったのだ。

だから私はなんとか気を失わずに済んだ。

もしもマ○コがあのままに感じていたら・・・。

魔王フーガ様の精液が流れ出続け、高揚を抑えきれないでいる中、私は自分にかけられた洗脳、あるいはオルクスにかけられているであろう洗脳の正体に確信を持った。

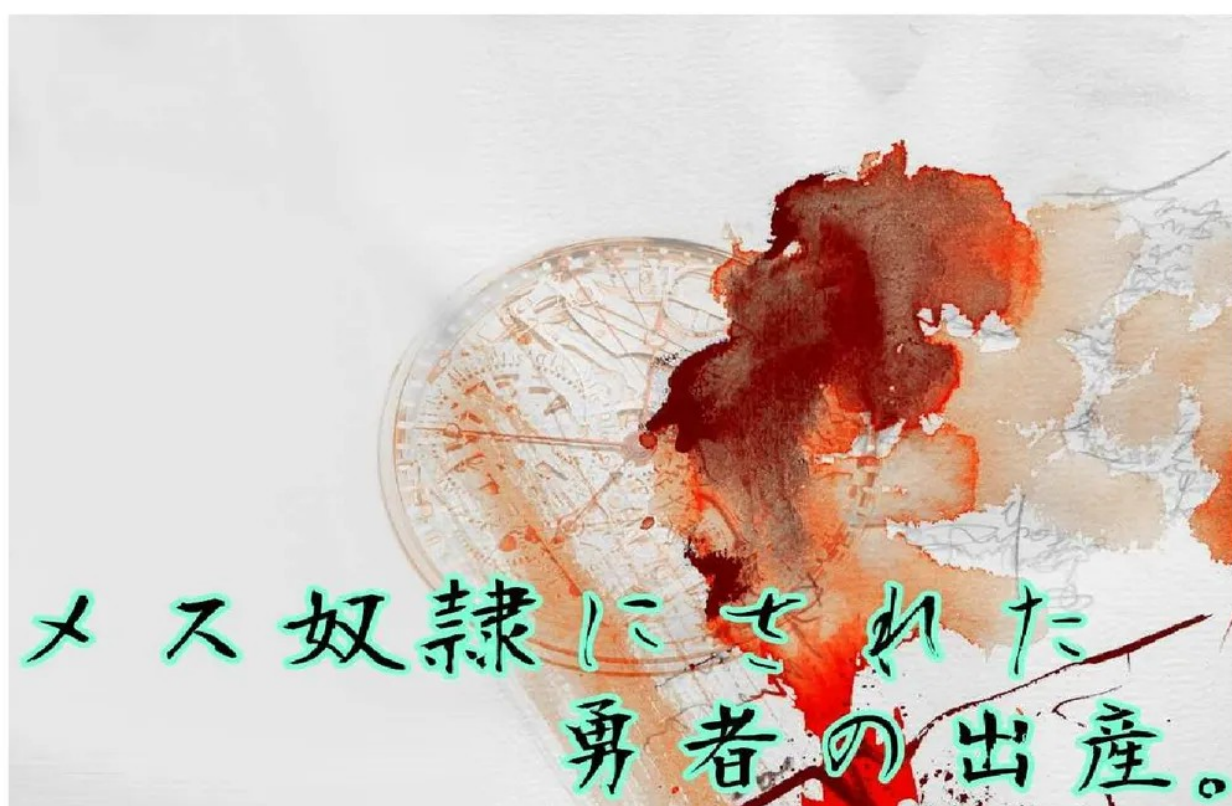
今もこんなに気持良くよだれが垂れているのだから、まず間違いない。

蕩けきったままの目で横を見ると、オルクスが私の目を見ていた。

遅い。

気が付くのが、遅すぎるよ。

オルクスにそう言われた気がした。



《第1章》

逃亡計画を練りながら過ごす毎日だったが、正直城の内部構造はほとんど把握できなかった。

地下牢と玉座の間、そして搾乳の間の3箇所とそれをつなぐ廊下しか目視できていないからだ。

しかもどうやらこの城、生きているらしい。

さながら人間の臓器のようにうごめいているのだ。

そして移動するたびに廊下の構造が変わってゆく。

私達は魔物の胃袋の中で生きているわけだ。

結局出たとこ勝負になりそうだ。

つまりは、逃亡する日に私の魔力がいかに残っているか。

残念だけど、オルクスはアテには出来ない。

彼を蔑んでいるのではなく彼の、強くなろうとする意志を信頼しているから……。

信頼しているからこそ、彼は弱くなると確信している。

彼の強くなろうとする意志は、本能に近いものだ。

本能に自意識が重なっていると言ったほうが正しいかもしれない。

だからこそ、彼は絶対にレベル1まで下がっているだろう。

つまり……戦力のアテにはできない。

結局のところ、私の魔力がものを言うわけだ。

逃亡の準備で私ができることは、魔力の蓄積のみ。

この1点に搾られた。

よし。

それなら出来る。

それだけなら可能だ。

それだけで……、良かったはずだった。

しかし、何日かして私の魔力がリミットいっぱいになる頃、白銀の鎧魔像に連れ出され私とオルクスは城の外に出た。

思いがけないことだった。

ありえないと思っていたことだった。

城の外に連れ出されるなんて。

こんなとんでもないチャンスが巡ってくるなんて。

無論、逃げられないように全身ガッチガチに魔法で拘束されていたし、移動も移動魔法で闇に沈められて、浮かんでくるだけ。

闇に沈められる不快感は相当なものだったが、肉体的な損傷は無い。

きつと魔族にとってはアレが気持ちの良いものなのだろう。

そして闇から浮かんで上がった先に見えたもの・・・それは、我が生まれ故郷だった。

変わらぬ街の風景。

世界を旅したがこんなにも安心できる場所是他になかった。

騎士団のお陰で治安が守られているからか、それとも生まれ故郷だからそう感じるだけなのか・・・。

半ば全裸に近いボロキレだけで立たされた私は、どこかホッとしてしまった。

しかしそれはオルクスの顔を見て、現実に戻されることになる。

オルクスは虚ろ目のまま汗まみれになって、顎を震わせていたのだ。

そうだ。

そうなのだ。

あのフーガ様が・・・。

白銀の鎧魔像が・・・。

ただ故郷に連れてくるだけで済ませるはずがない。

ここで何かをさせる気なのだ。

「・・・ここで殺す気？」

私の問いに、白銀の鎧魔像は何を言われたか分からなかったのか沈黙し、熟考してからこう答えた。

「殺すのは、殺さなければならない者だけだ」

「・・・はっ」

私は半ば蔑んだようにそう吐き捨てたが、内心安心していた。

オルクスの表情を見た時、最も恐れたのがそれだったからだ。

つまり処刑のために連れて来られたのだと思っていた。

オルクスの表情はそういう顔に見えた。

「・・・」

白銀の鎧魔像が無言で歩き出すと私やオルクスはその後ろをまるでイヌのように、四つん這いで、下を向いたまま歩かされた。

無論、魔法で無理矢理そうさせられた。

きつと後ろからはマ○コもアナルも丸見えのはず。

オルクスもそのことに気がついているのだろうか。

彼女の股はしっかりと濡れていた。

後ろから彼女のお尻を眺めると、まるで猿のように真っ赤に腫れ上がっていた。

まだ私にお尻を叩かれた痕が消えないらしい。

そもそも消えないように何か魔法がかけられている可能性もある。

今日のためにそうするくらいの悪趣味は、フーガ様も白銀の鎧魔像もやりかねない。

少し歩くと予想通り、人が大勢いた。

私達を見てすぐに人が集まってくると予想していたのだが、実際は“既”に集まっていた。

まるで死刑執行を観覧に来たかのように、私達を見つめている。

街の人の顔にアリアリと不安感が浮かんでいた。

それでもここに集まってしまっているのは刺激を求める大衆の本能ゆえか。

王族が居ない所を見ると、(何が行われるか知らないが)敗北した勇者と魔法使いを見るのはいたたまれないと思ったのか、あるいは白銀の鎧魔像がいるので、身の安全を測ったか。

どちらにせよ、これから私達にろくでもないことが起こることだけは確かだ。

私は下を向きなおして歩きながら、唇を噛んだ。

唇が出血し、私の歩いた道に点々と血痕がついていく。

どうやら終着点が近いらしい。

観衆の声が大きくなってきた。

それはつまり観衆の多さと観衆の期待値の大きさを示すもので・・・。

私は思わず顔を上げた。

上げてしまった。

見たくないものが、そこに有ると分かっていたはずなのに。

見ないまままで終われるはずもないと分かっていたのだが、それでも見たくはなかった。

そこには、杵とも枷とも呼べるものがあった。

断頭台、つまりギロチンにも似た形状の、木で出来た杵だ。

似ていると言ったが、断頭台とは構造が全く違う。

何にも似ていない何か。

「立て」

「・・・」

「・・・」

無言の抵抗もなく白銀の鎧魔像にオルクスは魔法で立たされた。
全裸のまま、気をつけのポーズで。

胸が弛む。

お尻が引き締まる。

乳首が勃つ。

そして愛液が垂れる。

彼、いや彼女はこういう事態にならないために強くあろうとしたはずなのに。
オルクスはこういう地獄から逃れるために強くあろうとしたはずなのに。
なのに、今これ以上無い屈辱を受けている。

あの愛液は、今も強くあろうとするオルクスの本心の現れだ。

太ももに垂れるオルクスの愛液を観衆の一人が指摘して、どよめきが起こった。
笑い声が起こった。

最初はクスクスと笑わっていたが、そのうち誰も遠慮すること無く。

そして嘲笑は、怒号に変わってゆく。

期待を持って送り出した勇者の無様さに対しての怒りなのだろう。

魔王の圧政に対する反逆として送り出された勇者は女にされ、恥をかきながら逝ってしまっ
った。

怒りを覚えて当然だと思う。

でも違うの。

オルクスは、感じたくて感じていたのではなくて・・・。

私は、どうしようもなくて。

何も出来なくて。

ただただほぞを噛んだ。

今ここで私が攻撃魔法を唱えることが出来たと仮定しよう。

白銀の鎧魔像に一矢報いることぐらいは出来るかもしれない。

でも観衆は？

間違いなく全滅する。

街自体が消し炭になってしまうかも。

だから撃つべきではない。

撃つてはならない。

それなのに・・・。

それなのに、観衆の怒号はやまない。

やまないどころかますます強くなってる。

そして怒号が強くなればなるほど、オルクスは責任を感じて逝ってしまう。

「・・・・・・・・畜生・・・・・・・・」

立たされていたオルクスは梓の中にお尻から座るようにして、入った。

両手を腰の上の枷になっている部分に嵌める。

嵌められた腕は肩を搾られたような形になっていて、ひと目で辛いことが分かった。

「お前はオルクスの後ろに座れ」

「・・・・・・・・？」

私は魔法で動かされる前に自分から動いた。

魔法で無理矢理動かされるのは嫌だったからだ。

せめて強制されずに、自分で歩きたかった。

私が言われたとおりにすると、白銀の鎧魔像は闇の底から轟くような声で観衆に演説を始めた。

「魔王フーガ様に逆らいし、勇者オルクスは女となった。

そして今現在、魔王フーガ様の御子を身篋っている。

今日がその出産日だ。

貴様に、将来の王を。

将来の、貴様らの主人を見せてやろう」

「・・・・・・・・؟؟？」

多くの観衆がそんなリアクションだった。

・・・・そうかつ！

そうなのだ！

今の今まで気が付かない方がおかしかったのだ。

私やオルクスは戦えば戦うほどに敵のレベルが上っていった。

まるで、ちゃんと順番通りに戦えば確実に強くなれるよう最初から作られていたかのよう。

それはこのためだったのだ。

自身の子供を人間の勇者に産ませるためだったのだ。

そのためには生きたままで城に来てもらわなければならない。

それもある程度強くなってから。

母体が強くなったことが有るという事実が、生まれてくる子供の潜在能力の量を左右する事は、人間界でも知らない者はいない。

だから一度勇者を強くしてから、女にし、そして最後に抵抗できぬようにレベルを下げた。

オルクスが魔王フーガ様に種付けされたのは、恐らく私と別々にご奉仕させていただいた時だろう。

私達の旅は、魔王フーガ様の子供を生むために、強くなる旅だったのだ。

最初からそうなるようにコントロールされた旅だったのだ。

私は恐らく勇者が子供を生めるだけの強さを持っていない時のためのダミー、補欠要員だ。

しかしそれにしてはこの枠は、出産に向いているとは思えない。

いわゆる出産用のベッドとは似ても似つかない。

私の足元に白銀の鎧魔像は先の細いスプーンを投げ捨てた。

蜂の巣に差して、ハチミツを掬うスプーンだ。

「拾え。そして、それで魔王陛下の御子をほじくり出すのだ」

「・・・」

抵抗は無駄だったらしい。

無理矢理魔法で拾われた。

どうやらこれが出産に関する全ての準備が為されたらしい。

オルクスが一つ大きく震えた。

そして大きく桃色の吐息を漏らす。

私はそれを彼女のお尻越しに眺めながら、スプーンの使い方に悩んでいた。

オルクスの、この体勢ではマ○コは閉ざされている。

どう考えてもマ○コから固形物を出せる体勢ではない。

もしも出せるとしたら、おしっこぐらいのもの。

しかしすぐに疑問は解消された。

オルクスのアナルが大きく開いてゆく。

ピンク色の肛門から、異臭を放つ暗闇が垣間見えた。

暗闇の中から現れたのは、人間の排泄物に有るまじき紫色の異物。

人の親指ほどの大きさの、ヤモリのような色の・・・人の子だった。

次々と、溢れてくる。

「ひっ！！！」

のけぞって、怯えた私を白銀の鎧魔像は魔法で制御し、ソレを受け止めさせた。

1体、2体、3体、4体、5体・・・

いったい全部で何体、入っていたのだろう。

次から次へと出てくる。

異形の形、化学薬品を焼いたような異臭、そしてオルクスのアナルから生まれでたという事実。

その全てが気持ち悪い。

私はそういう風にソレを意識してしまった。

そして意識したということは、洗脳が作用するというきっかけになるということであり・・・。

私は一瞬にしてソレに欲情し、ソレを受けとめることを、幸せに感じてしまった。

そして幸せに感じてしまった以上、よりソレを求めてしまう。

白銀の鎧魔像に渡されたスプーンを、オルクスのアナルに挿れ、中をほじくる。

オルクスのアナルの中の肉壁がどうなろうと知ったことではないが、中のソレだけは傷つかぬよう慎重に、慎重に。

いつしかオルクスは全身汗まみれになって、全身を紅潮させて、全身を震わせて・・・。

そして「あぐ・・・あぐ・・・」と声を漏らしながら、震えていた。

私がオルクスのアナルの中にスプーンの先を差し込んでほじくっていると、相当に痛かったらしく、オルクスはじたばたとその場で暴れた。

暴れることが出来た。

どうやら今は魔法で拘束されていないらしい。

下手に拘束すると、ソレの出産に影響するからだろうか？

私はスプーンの先に、もう一匹ソレがオルクスの中でうごめいているのを感じていた。

一度スプーンを一度抜いて、オルクスが呼吸を整えてから、再度挿れ治そうとした時、

オルクスはオシッコを・・・。

オシッコを漏らし始めてしまった。

漏らしたと言うよりは、失禁したという方が正しいだろう。

さながら、小便小僧のようにビュッと虹と同じカーブを描いてソレが地面に放射される。

失禁事態は、弱いモンスターのなぶり殺した時何度か目にしたが、人間のそれでは・・・、ましてや女の失禁など見たこともなかった。



しかし私は気にせず続けた。
どうしても。

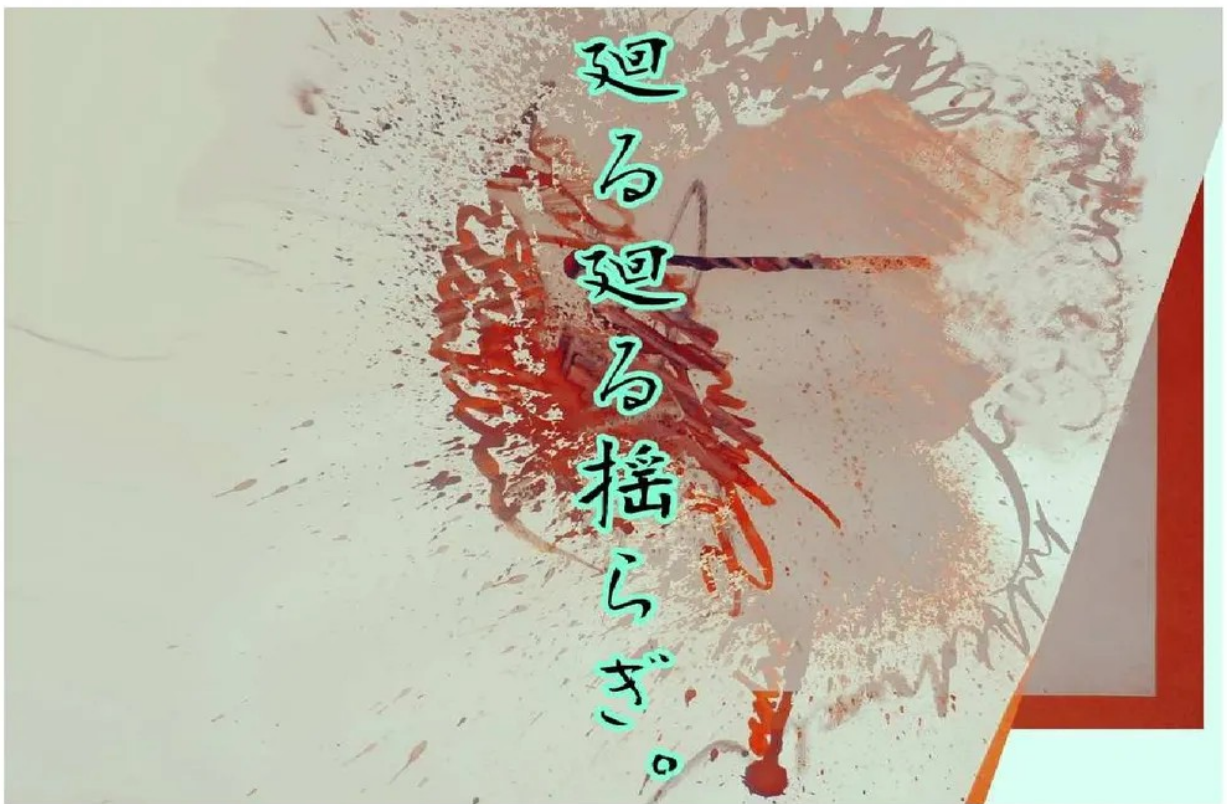
今すぐにも最後のソレが、欲しかったのだ。
手にとって、誰かに自慢したかった。

私はこんなにも幸せな立場に有るのだと。

未来の魔王様になるであろう御子の産婆となったのだ。

しかしそれも一瞬の夢。

ソレらは白銀の鎧魔像に取り上げられ、どこかに送られてしまった。



《第1章》

私達の最後の話をしよう。

私達はあの出産から何百年もソレの世話をするメイドとして、徹底的にコキ使われた。ソレ達に顎で使われ、ソレ達の誰から機嫌が悪くなると、オルクスと私は互いに折檻し合った。

尻叩き、シックスナインでのクンニ、全裸で人間界の世界一周。どんなことでもさせられた。

100年、200年、300年と。生まれ故郷はもう無い。

国が滅びたからだ。特に魔王フーガ様が手を下されたわけでもない。

単なる経済破綻による、自然崩壊だった。

友人は、何世代も先の末裔と呼ぶべき世代に転生しているだろう。

時代が変わり、人が変わり、土地さえも地殻変動で形を変えた。

そんな日々がようやく終わったのは、ソレ達が魔王フーガ様に反旗を翻した時だった。

長い時間を掛け、ソレ達は魔王フーガ様に対抗しうる力を得た。

少なくとも、ソレ達はそう考えたようだった。

結論から言うと、その考えは間違っていた。

しかしここで誤算が生じる。

戦いの結果、フーガ様の魔力は普通の人間と変わらぬレベルまで下がってしまった。

白銀の鎧魔像は言うに及ばず。

当然私とオルクスはそのチャンスを見逃さなかった。

そして間違いなく私は白銀の鎧魔像を、この手で殺した。

積年も積年。

恨み骨髄。

この手で白銀の鎧魔像を殺した時の喪失感は、私を構築する全てが魔王フーガ様と白銀の鎧魔像に与えられた恥辱で出来ていたことを実感させるものだった。

そして魔王フーガ様である。

魔王フーガ様は、最後の最後の瞬間まで、嘲笑っておいでだった。

私とオルクスを嘲笑って、見つめていた。

「・・・やつと来たか。

待ちくたびれたぞ。

俺の死よ。

そして次の絶望よ」

そうおっしゃった。

「構わないわ。

オルクス。

やって!!!!」

「死ねっ!!!!」

オルクスはレベルがこれ以上下がらないはずの所まで下がっているはず。

それでも勇者が魔王を討つ。

これだけは未来永劫変わらぬ真理だ。

だからオルクスに最後の一撃を任せた。

それがせめてもの、人間としての様式美だった。

しかしその判断は間違だった。

オルクスは剣で魔王の心臓を貫き、私と自身の心臓を取り返した。

そこまでは・・・。

そこまでは良かった。

問題はその後。

心臓が身体に戻った途端。

オルクスは、身体が変色した。

そして頭からツノが生えた。

身体は膨れ上がり、10代の女性の身体から、20代後半の女性の身体に変わった。

黒髪にはウェーブがかかり、黒い瞳が紅玉に変わる。

そして溢れだす圧倒的な魔力、魔力、魔力。

最初それはオルクスが元来のレベルに戻った反動だと思った。

いや、思おうとした。

ボジティブに捉えようと心がけた。

無論期待は、裏切られる。

そこに居たのはまごうことなき、魔王だった。

フーガ様とは違う。

女性の魔王だった。

魔の女王オルクス。

そう呼ぶにふさわしい、女王がそこにいた。

私は腰から崩れ落ち、地面に尻餅をついて、乾いた笑いを上げてしまった。

魔族は、肉体が老化しない。

世代が変わるとしたら、子供が成長し、親殺しをする時だけだ。

だからソレ達が生まれた時、私はソレの中の誰か一人が次代の魔王陛下なのだろうと思
い込んでいた。

が・・・、違った。

ソレ達は所詮フーガ様の体力を削ぐための道具に過ぎなかった。

結果としてそうだったのではない。

最初からそう仕組まれていたのだ。

そのことを知ったのは、何かオルクスの魔族化を解く方法がないかとフーガ様の書物庫
を漁っている時だった。

そこには、魔王フーガ様の遺書があった。

人間の文字で、それも古代の女しか使わなかったとされる女文字で書かれた遺書が・・・。

『拝啓。

改めて、はじめまして。

魔王を務めているフーガという者です。

遺書を見つけたということは無事、あなた方のどちらかが魔王となったということでは
ね？

最初に事の経緯を話させて下さい。

私は、『女』です。

あなた方が私に挑む800年ほど前に私は、女勇者として魔王に挑み、そして負けまし
た。

その後あなた方と同じように心臓を奪われ、性転換をさせられ、男として先代の魔王（信

じられないかもしれませんが、先代の魔王は「女」でした。多分、元は人間の男でしょうが・・・に発狂しないよう洗脳され、奉仕させられ、あまつさえ子供の世話までさせられました。

それが1100年前、つまりあなた方が私に挑む800年前に転機を迎えました。

私は先代魔王の子どもたちが先代魔王に挑み、殺された時、魔王が史上類を見ないほどに弱っていることを感じました。

だから、私が先代魔王を殺しました。

先代魔王が死に、私が心臓を取り戻した時、ようやく自身の異変に気がついたのです。

つまり私のレベルは数百年、先代魔王に奉仕を続けた結果、私の戦闘レベルは『1』ではなく、マイナスまで下がっていたのです。

数字は0以上下がることはないと思っているのは、間違いです。

マイナスにまで、当たり前のように下がります。

事実、魔族のレベルはマイナス1からスタートし、数字が下がれば下がるほど強くなります。

つまり、マイナス150の魔族は、マイナス450の魔族に劣る、ということです。

私の次に現れた勇者、オルクスは責任感が強いようなので、責任を感じた時洗脳が発動するよう、白銀の鎧魔像には申し付けました。

結果、間違いなくオルクスのレベルはマイナスまで下がっているはずですが、

無論、魔法使いさんも。

それでも、この遺書を読んでいるということは私を打ち取ったということですから。

人間として、一人の女として、おめでとうを言わせて下さい。

おめでとうございます。

それから、本当にありがとうございます。

此処から先はあなた方への魔王としての呪いの話です。

あなた方の洗脳は解けることはないでしょう。

私も800年間、ありとあらゆる方法を試しましたが不可能でした。

勇者オルクスさん、魔法使いさんともに脳と体が真逆に反応する洗脳をかけてあります。

そしてオルガズムを感じたら、レベルが下るように肉体に変化を施しました。

上手く付き合ってください。

私もそうしました。

あなた方がこの呪いを解く方法は、もうお分かりですね？

先代魔王がそうしたように、あるいは私が（成功したかどうかは別として）そうしたよ

うに。

次の勇者に、私があなた方にしたことを繰り返せば良いのです。それ以外に方法は有りません。

こんなことをお願いするのは、私がお願いするのは間違いないあなた方への侮辱でしょうが、あえてお願いさせて下さい。

出来ることなら、人間界への支配や圧政を避けるためにも早い段階での魔王の座を交代させることを第一に考えて下さい。

時間が経てば経つほど、魔王としての意識が芽生え、飲み込まれ、人間を恨むようになり、殺したくなります。

私がそうであったように。

だから、極論を言えば常に、魔王が世代を変えて生きてゆくことが、人間界の為なのです。

どうぞ、人間界をよろしくお願いします。

『女勇者フーガ。』

「……人間……だったの？」

「しかも女……？」

フーガ様が？

私とオルクスはお互いに顔を見合わせた後、呆れてしまった。

呆れるという言葉しか浮かばなかった。

圧倒的過ぎる喪失感と絶望感があつたはずだが、認知できなかった。

むしろフーガ様が残した遺書の、人間臭さに呆れてしまった。

人間のことで考えていない、そして私やオルクスという他人よりも自分のことを優先させた、いかにも人間らしい経緯と、そこに飾りのように付けられたお礼の言葉。

そして古めかしすぎて読むのに苦労した女文字。

いかにも自分優先の人間らしい遺書だった。

私とオルクスは、滅んでしまった生まれ故郷に帰り、1から国でも作ろうかとも考えたが、オルクスの見目を考えると到底それは出来そうになかった。

それから私とオルクスは、すぐに決断した。

魔王としては生きないことを。

しかし自殺するのは忍びない。

オルクスが死ぬのは私が耐えられなかった。
だから私達は・・・。

《第2章》

「フオッフオッフオッフ。」

この村は初めてかな？

旅のお方」

「あ、はい。」

「ここが人間界の果てだと聞いてきたのですが」

「フオッフオッフオッフ。」

そのとおりじゃよ。

「ここが、人間が立ち入れる果て。」

「……それにしても、盛況なところですね」

「温泉が出るからのう」

「温泉が？」

「それも天然の魔力が吹き出す温泉じゃ。」

「アンタも浸かってゆきなさい」

「はい。じゃあ、試しに」

「はい。じゃあ、試しに」

「はい。じゃあ、試しに」

魔族の世界と人間界は大きな魔力の流れが存在する。

陰と陽。光と影。聖と邪。

魔王と勇者両方だった人間がその中心で封印されている。

彼は元々人間の男だったが、どういうわけか魔王になった際は女だったらしい。

そしてその隣には、魔法使いと魔王の両方だった人間が同じように封印されている。

彼女は逆に、人間の魔法使いだった頃は女だったらしいが、魔王としては男であったそう。

石碑にはオルクスとアリアと名前が刻まれている。

なぜこの二人は魔界と人間界の間に閉じ込められたのか、そしてなぜ二人なのか、なぜ

性転換をしたのか、伝承学者、魔法学者の間では永遠の謎とされている。

しかしこの謎が解けた際、魔王の王政が復活するとも言われているので、誰も解明をし

ようとしていないのも事実だ。

そしてここ、人間界の果ての果ての村では、今日も温泉が湧き出ている。

魔王であり、勇者である二人から漏れ出る魔力で、マグマが活性化し、温泉が湧き出る

のだ。

温泉の効能は、……最後に話そう。

その前にオルクスとアリアの結末というか、現状について話しておきたい。

オルクスとアリアは、知恵を絞った。

どうせ自分たちもこのままではフリーガと同じになる。

それは避けられそうにない。

ならば、オルクスとアリアで、その役回りを回したらどうなるのだろうか？

つまりオルクスが魔王の間は、アリアが奉仕し。

フリーガがオルクスに魔王の座を譲ったのと同様に、オルクスはアリアに魔王の座を譲る。

この時、アリアはオルクスを殺さない。

そう、オルクスがアリアに洗脳しておけば良い。

今度は逆に、アリアが魔王として君臨し、オルクスはアリアに奉仕する。

アリアはオルクスに自分を殺さずに魔王の座を交代するよう洗脳しておく。

ただただこの繰り返し。

封印と先ほど記載したが、実際は人間界と魔界の間に亜空間を作り、そこで生活しているだけだ。

ただただ性転換と、魔王の座と勇者の座を順繰りで回し合う。

こうすることで極めて長期間、人間界に魔王の圧政は生まれずに済む。

実際、あまりに長期間魔王の圧政が無くなってしまった為に、魔界でも人間界でも魔王は封じられたのだと知れ渡っている。

魔王の無い時代が来たのだと。

そしてその時代はオルクスとアリアがもたらしたのだと。

しかしオルクスもアリアも、気がついていない。

魔族にも寿命があることを。

いつかは二人の内、どちらかが寿命で死ぬ。

死んだら、魔王としての自分はこの亜空間を抜け出し、人間界に圧政を敷くだろうと。

だから。

だからこそ、せめて。

せめて私達の内のどちらかが死ぬまでは、人間界が平和であって欲しい。

そう願っている。

いつか再び来るであろう、魔王圧政の時代が来るまでは・・・。

「あーっ！！！！！！！！
なんだよこれ！」

【奥付け】

★製作★

所属…M小説同盟
同人サークル…TSリボルバー

★制作協力★

挿絵CG

sinzan様

ホームページ…

<http://kiss-the-littlestar.jp/gallery/sinzan.html>
PIXIV :

<http://www.pixiv.net/member.php?id=13413>